

# 生徒の心をサポートする

## —ピア・サポート・トレーニングの実践(第3報)—

兒玉 憲一 岡本 百合 内野 悌司 佐々木祥子  
伊賀 泰恵 新治 功 有田 正志 橋本 直子  
溝上 直美 犬東 有里

### 1. 問題と目的

広島大学附属高等学校(以下、本校とする)の保健室や相談室には、友人関係のトラブルに悩む生徒が多く訪れる。この中には対人関係能力の低さゆえのものも多く見られる。一方で多くの文献によれば、生徒は悩みを抱えたり、困ったとき、自分の友人に相談することが最も多い(田邊, 1999; 森川, 2002)。

このような現状を踏まえ、近年、日本各地で、生徒の対人関係能力や自己表現能力を改善するための一環として、子どもたち相互の人間関係を豊かにするための学習の場を各学校の実態に応じて設定し、そこで得た知識やスキルをもとに仲間に対し支援の実践を行うピア・サポート活動が導入され始めている(森川, 2002)。

そこで、本校でもピア・サポート活動を導入し、平成15年度から3ヵ年計画で実践を行ってきた。本報告はその3年目の実践を報告するものである。なお、一昨年度の実践の概要は本紀要の32号に、昨年度の実践の概要は同33号に報告した通りである(後藤・伊賀・世羅・日浦・溝上・湯浅・鈴木・兒玉・岡本・佐々木, 2004; 後藤・伊賀・尾澤・新治・世羅・溝上・兒玉・内野・岡本・佐々木, 2005)。

生徒間で支援活動を行うことについては思春期で揺れやすい生徒にとって精神的な負担が大きいと考え、本研究ではピア・サポート・トレーニング(以下、トレーニングとする)のみを行うこととした。トレーニングの目的は、第一にトレーニングを受講する生徒(以下、受講生とする)の自己肯定感・自尊感情の向上、コミュニケーション能力の習得とし、第二に受講生が学んだスキルを生かすことで徐々に学校内に支え合いの雰囲気醸成するなど、周囲の生徒への好影響・波及効果を期待することとした。

この目的に沿った上で、後藤他(2004)・後藤他(2005)で明らかになった課題を踏まえ、トレーニングの実践及びその効果評価を行った。

トレーニングの実践については、後藤他(2004)・後藤他(2005)によりトレーニングが学校行事と同時期に実施された場合に受講生の出席率が低下するということが明らかになり、後藤他(2005)において開始時期をずらすことが提案された。また、一昨年度・昨年度の受講生(以下、修了生とする)をアシスタントとして迎え、トレーニングをピア・エデュケーション的な活動の場としサポート活動への導入を図ることも提案された(後藤他, 2005)。

トレーニングの効果評価については、後藤他(2004)、後藤他(2005)ともにプリテスト・ポストテスト法による質問紙調査、トレーニング終了時の多肢選択法によるアンケート調査及び自由記述によるアンケート調査、各回の振り返りシートを用いて多面的に効果評価を行った。後藤他(2005)では佐々木(2004)を受けプリテスト・ポストテスト法で用いる質問紙に改善を加えたところ、トレーニングの第一の目的である自尊感情・自己肯定感の向上、コミュニケーション能力の習得の確認がなされた。また、トレーニングの第二の目的についても、生徒が最も親しい友人にサポートを与え、また与えられるようになる(サポートの授受が促進される)ことが確認された。しかし、後藤他(2005)では友人を受講生が最も親しいと考えている友人に限定して検討したため、その他の周囲の生徒への波及効果を十分に検討することができていない。また、橋本(2005)によれば、サポートは機能的測度という観点から2種類に区分されている。サポートが必要なときに、どの程度入手可能かと思われるかという観点からサポートを捉える知覚されたサポート、サポート行動

が実際にどの程度行われたかという観点からサポートを捉える実行されたサポートである。後藤他(2005)では実行されたサポートのみを測定している。

そこで、本年度は、トレーニングの実践において開始時期をずらし、また、修了生をアシスタントとして迎えることを試みた。また、効果評価において、第二の目的の詳細な検討のために、誰とどのようなサポートをやりとりしているのかを明らかにすることを試みた。この点については、友人の性別による違いがあるのか否かを検討し、また、知覚されたサポートの概念を導入した。

なお、本報告執筆時点で、トレーニングは実施している最中である。現在、プレテスト及び7回のトレーニングが終了している。そこで本報告ではそれらの報告のみを行い、今年度の変更点について報告する。さらに、そのことにより生じたと思われる後藤他(2004)・後藤他(2005)との相違点について現時点で明らかになっていることをまとめ、今後の示唆を得ることとする。

## 2. 本年度のトレーニングの概要

### (1) 受講生の募集と受講生の応募動機

4月下旬及び9月中旬に1・2年生を対象に保健部教諭よりトレーニングの説明、応募用紙の配布を行い受講生を募集した。この時点での希望者は1年生10名(男子2名・女子8名)、2年生4名(全て女子)の計14名であった。この14名に加え、今年度は、トレーニングの3回目に保健部の教諭に勧められる形で1年男子1名が参加、さらに5回目に既に受講している友人に勧められる形で1年女子1名が参加を始め、計16名が受講している。これは一昨年度・昨年度の23名に比べ7名少なかった。

なお、募集時点で希望した14名の応募用紙に応募動機の記入があった。「人と接する職業に興味がある」「将来医師になりたい」など将来目標とする職業への興味からくるもの、「友達関係が上手でないから」「なかなか友達とうまく話せないから」など友人関係の改善を望むもの、「人と上手く接せられるようになりたいから」「悩んでいる友人を見ても、いつも何を言っても良いか分からず、もどかしく感じている」などコミュニケーションスキルの獲得を目指すものなどがあった。これらは後藤他(2004)・後藤他(2005)と同様の傾向であった。

### (2) 指導形態

大学でトレーニングを受け実際に大学ピア・サポート・ルームで活動しているピア・サポーター(大学院

生・大学生)及び記録係も兼ねて同席した本校の相談係、養護教諭ら保健部の教員によるチーム・ティーチングであった。

### (3) 時期・時間・回数・場所

後藤他(2004)・後藤他(2005)では5月下旬～7月下旬及び10月上旬～12月上旬に実施したが、既述のように同時期に実施される学校行事による出席率の低下を出来得る限り避けるために、9月下旬に開始した。12月上旬までに7回実施したところである。1回あたりの時間は約60分であり、いずれも放課後に保健教室または研修室において実施した。なお、1月中旬以降5回実施される予定である。

### (4) 各回の構成

後藤他(2004)・後藤他(2005)同様、導入、ウォーミングアップ、主活動、振り返り(振り返りシートへの記入)からなっていた。

### (5) 内容

表1に7回の内容について概要を示す。後藤他(2005)において内容には改善が進んでおり、基本的にその内容を踏襲する形で行った。1点のみ、上述のように、修了生をアシスタントとして迎えた点のみが異なっていた。また、内容の細かな部分については1回目の主活動で行った自己紹介(私はキャスター)の進め方についてのみ変更を行った。具体的には、一昨年度・昨年度に受講生全員の前での自己紹介に対する緊張感や抵抗を示した受講生がいたため、本年度は小グループに分けその中で自己紹介にとどめた。

アシスタントを迎えた点については、具体的には、2回目に修了生を迎え、受講生に対し、「トレーニングを受けて役に立ったこと」「どうしてトレーニングを受けようと思ったか」「オススメのトレーニングの受け方」などを話してもらった。修了生には、保健部教諭より参加を呼びかけ、参加は任意とした。一昨年度を受講生1名(現3年男子)、昨年度を受講生1名(現3年男子)、計2名が参加した。

なお、この2名のうち1名は3回目以後も自発的にトレーニングに参加し、受講生とともにロール・プレイを行ったり、トレーニングの後でトレーナーに学業や進路面での相談をしたりしていた。

表1. トレーニングの内容

回	テーマ	ウォーミングアップ	主活動
1	ピア・サポートをはじめよう！	ペア作り	私はキャスター
2	①続・ピア・サポートをはじめよう！ ②自分の良いところを知ろう！	修了生を招いて	エゴグラム
3	心の栄養をとろう！	私の学校 (教室配置図)	ストローク
4	サポートって何だろう	ペアを探そう	ブラインドウォーク・トラストウォーク、援助の基本的な考え方
5	聴く練習1 (積極的な話の聴き方)	伝達するときの位置関係	FELOR
6	聴く練習2 (質問をしよう)	紙を使って	開かれた質問と閉ざされた質問
7	聴く練習3 (気持ちを聴き取る)	①ペアを探そう ②私の気持ちに分かりますか？	感情の反映技法と反復技法

### (6) 生徒の出席状況

既述のように今年度は出席率を上げるために開始時期をずらした。その影響があったか否かを検討するために出席率を算出した。表2は各回ごとの出席者数と出席率を示したものである。参考までに昨年度の出席率も併せて示した。

表2. 各回ごとの出席者数と出席率

回	出席者数	出席率	昨年度の出席率
1	11名	78.6%	91.3%
2	12名	85.7%	100%
3	13名	86.7%	47.8%
4	12名	80.0%	73.9%
5	13名	81.3%	52.2%
6	12名	75.0%	39.1%
7	11名	68.8%	47.8%

### 3. トレーニングの効果の評価

トレーニングの効果を検討するため、後藤他(2004)・後藤他(2005)同様、プリテスト・ポストテスト法による質問紙調査、トレーニング終了時の多肢

選択法によるアンケート調査及び自由記述によるアンケート調査、各回の振り返りシートの4種類を用いて効果評価を行う予定である。現在、トレーニングが進行中であるため、プリテスト及び7回分の振り返りシートのみ回収が終了している。ここでは、プリテストの結果及び7回分の振り返りシートについて報告する。

#### (1) プリテスト

##### 方法

##### 1) 対象者

受講生全員(16名)(以下、受講生群とする)及び受講生以外の生徒69名(1年男子22名・女子15名、2年男子20名・女子12名)(以下、統制群とする)であった。

##### 2) 質問紙

以下の4尺度を用いた。

##### ① 積極的傾聴態度評価尺度(三島, 1999)

トレーニングで学ぶスキルが身についたか否かを測定するために用いた。「相手の気持ちにも注意しながら聞いている」などの計20項目に対し「1. いつもそうでない」～「5. いつもそうだ」の5件法で回答した。

##### ② 友人へのサポート提供尺度(谷口・浦(2003)を改変)

トレーニングにより友人へのサポート提供が増加するか否かを検討するために用いた。友人の性差について検討するために、谷口・浦(2003)の作成した6項目(例:「友人が何か失敗をしたら、そっと助けてあげる」)の文頭に「最も親しい同性の」「最も親しい異性の」と友人の性別を区別する言葉を冠し、同性サポート6項目・異性サポート6項目を作成した(例:「最も親しい同性の友人が何か失敗をしたら、そっと助けてあげる」「最も親しい異性の友人が何か失敗をしたら、そっと助けてあげる」)。それらに対し、知覚されたサポートを測定するために「1. 絶対してあげられない」～「4. きっとしてあげられる」の4件法、実行されたサポートを測定するために「1. 全くなかった」～「4. よくあった」の4件法を設け、それぞれについて回答した。

##### ③ 友人からのサポート受領尺度(谷口・浦(2003)を改変)

トレーニングにより友人からのサポート受領が増加するか否かを検討するために用いた。友人の性差について検討するために、谷口・浦(2003)の作成した6項目(例:「あなたが何か失敗しても、そっと助けてくれる」)の文頭に「最も親しい同性の友人」「最も親しい異性の友人」と友人の性別を区別する言葉を冠し、同性サポート6項目・異性サポート6項目を作成した(例:「最も親しい同性の友人は、あなたが何か失敗し

でも、そっと助けてくれる」「最も親しい異性の友人は、あなたが何か失敗しても、そっと助けてくれる」。それらに対し、知覚されたサポートを測定するために「1. 絶対してもらえない」～「4. きっとしてもらえない」の4件法、実行されたサポートを測定するために「1. 全くなかった」～「4. よくあった」の4件法を設け、それぞれについて回答した。

#### ④ 自己受容尺度 (平石, 1990)

トレーニングにより自尊感情・自己肯定感が向上するか否かを検討するために用いた。「自分の個性を素直に受け入れている」などの計4項目に対し、「1. あてはまらない」～「5. あてはまる」の5件法で回答した。

#### 3) 調査時期

トレーニング開始前の9月下旬に行った。

#### 4) 手続き

受講生群についてはトレーニングを行った教室にて集団で実施、統制群については授業時間を利用して集団で実施した。

### 結果

積極的傾聴態度評価尺度、友人へのサポート提供尺度、友人からのサポート受領尺度、自己受容尺度のそれぞれについて、欠損値のあった者を除いた上で群別に得点の平均値及びSDを算出し、プリテスト時点で群間で差があるか否かを検討するためにt検定を実施した。

以下、各尺度ごとに結果を示す。

#### 1) 積極的傾聴態度評価尺度

表3に受講生群及び統制群における得点の平均値(SD)を示す。平均値の差をt検定で検討した結果、有意差は見られなかった。

表3. 受講生群・統制群における積極的傾聴態度評価尺度のプリテスト得点の平均値(SD)

尺度	受講生群	統制群
積極的傾聴態度評価尺度	65.6(9.9)	66.7(9.3)

#### 2) 友人へのサポート提供尺度

知覚されたサポート、実行されたサポートそれぞれについて友人の性別に平均値(SD)を算出した。表4に受講生群及び統制群における得点の平均値(SD)を示す。平均値の差をt検定で検討した結果、いずれも有意差は見られなかった。

表4. 受講生群・統制群における友人へのサポート提供尺度のプリテスト得点の平均値(SD)

	尺度		受講生群	統制群
	知覚/ 実行	同性/ 異性		
友人への サポート 提供	知覚	同性	18.8(4.2)	19.8(2.9)
		異性	16.8(3.3)	17.4(4.0)
	実行	同性	18.2(3.9)	17.8(3.9)
		異性	13.8(4.6)	13.3(5.4)

#### 3) 友人からのサポート受領尺度

知覚されたサポート、実行されたサポートそれぞれについて友人の性別に平均値(SD)を算出した。表5に受講生群及び統制群における得点の平均値(SD)を示す。平均値の差をt検定で検討した結果、いずれも有意差は見られなかった。

表5. 受講生群・統制群における友人からのサポート受領尺度のプリテスト得点の平均値(SD)

	尺度		受講生群	統制群
	知覚/ 実行	同性/ 異性		
友人から のサポー ト受領	知覚	同性	19.2(4.7)	18.9(3.7)
		異性	15.0(4.4)	16.1(3.9)
	実行	同性	19.9(3.1)	18.0(4.3)
		異性	14.9(4.9)	14.0(5.0)

#### 4) 自己受容尺度

表6に受講生群及び統制群における得点の平均値(SD)を示す。平均値の差をt検定で検討した結果、受講生群の方が有意に得点が低かった( $t(80)=-2.82$ ,  $p < .01$ )。

表6. 受講生群・統制群における自己受容尺度のプリテスト得点の平均値(SD)

尺度	受講生群	統制群
自己受容尺度	13.3(4.6)	16.0(3.3)

### 考察

積極的傾聴態度評価尺度及び友人へのサポート提供尺度、友人からのサポート提供尺度については、後藤他(2005)同様、受講生群と統制群の間でその得点に有意な差は見られなかった。よって、トレーニングを行う前の時点で、身につけているスキルやサポートの授受の様相については差がないと考えられる。一方で、自己受容尺度については、後藤他(2005)と異なりトレーニングを行う前の時点で受講生群の方が有意に得

点が低かった。受講生群の生徒が他の生徒に比べ自己肯定感が低い可能性が示唆される。トレーニングを進めていく上で本結果を生徒の特徴を示す可能性として留意する必要があるだろう。

また、友人へのサポート提供尺度・友人からのサポート受領尺度については、群間での差は見られなかったが、得点そのものは後藤他（2005）より高い値を示している。今回、友人の性差について検討するために質問項目を変更、また、サポートの機能について検討するために選択肢を変更したため、一概に後藤他（2005）との比較はできないが、プリテストの実施時期の違いにより得点の差が生じた可能性があると考えられる。後藤他（2005）では1学期の5月下旬という入学・進級後比較的早期に行ったのに対し、今年度は2学期に行った。友人関係が進行していることは想像に難くなく、そのためサポートの授受が増加していた可能性が考えられる。本年度のように2学期にトレーニングを開始する際には、トレーニングの目標であるサポート授受について1学期とは状態が違っていることを踏まえる必要があることを示唆していると考えられる。

## （2）各回の振り返りシート

### 方法

#### 1) 対象者

各回に出席した受講生全員であった。内訳は1回目が11名、2回目が12名、3回目が13名、4回目が12名、5回目が13名、6回目が12名、7回目が11名であった。

#### 2) 質問項目

後藤他（2005）同様、「今回の活動で気づいたことや分かったことを書いてください」「今回の活動で心地よかったです、温かい気持ちがあったところを書いて下さい」「今回の活動で何か自分の意識や考えが変わったところがあれば書いて下さい」「その他、活動に関して感想があれば何でもどうぞ！」「トレーナーや先生への質問や相談があれば記入してください」の5項目を用いた。

### 結果

各回ごとに得られた主な記述を以下に挙げる。

#### 1) 1回目

- ・ピア・サポートと聞くと最初から専門的なトレーニングや知識を習うのかと思っていましたが話しやすい雰囲気でした。
- ・思っていたのは、もっと講義みたいなものだったけど、実際に話したりしてもっと楽しめました！
- ・ピア・サポートって結構堅苦しそうだなーと

思っていました、全然違ってとても面白かったです。

- ・「話すのが苦手」って思ってるけど、きっかけがあれば喋れるんだから、声を出してみようと思った。
- ・人が話している時はちゃんとその人の顔（目）を見る!!というのを意識するようにしました。

#### 2) 2回目

- ・先輩の話聞いた時、先輩方がずっと笑顔でやわらかい口調で話して下さったのが心に残りました。私も1年後あのようになれたら嬉しいです。
- ・先輩でも同じような悩みを持って過ごしていて、それを自分なりに解決できる方法をこの場を使って身につけることができるとわかった。
- ・なかなか興味深い先輩の話も聞けて、次が楽しみにになりました。
- ・2人の先輩方がピアサポートを受けて「明るくなった」と言われたのがとても印象的で嬉しくなりました。私もそんな風に思えるようになっていたのでこれからも頑張ります。
- ・自分にも長所があって、他の人にも誰にだってちゃんと長所があるんだなーと思えた。
- ・私は自分の短所や欠点ばかり気になり、自分の良い所に気付いていませんでした。でも今回の活動で良い所もあることに気づき、伸ばす努力をしようと思いました。
- ・NPが低かったのもっと周囲に気を配れるようになりたいと思った。また、少々責任感が足りないのもっと自分に厳しくなりたいと思った。

#### 3) 3回目

- ・自分の口が少し悪いので、相手を傷つけていないか？という考えが生まれた。
- ・自分で意識してみると、ポジティブなストロークもネガティブなストロークも言っているのかなと思って、これからはポジティブなストロークだけを使っていこうと思った。
- ・1つの言葉で嬉しくなったり悲しくなったりする程、言葉の力が大きいということ（が分かった）。
- ・初対面でも意外と話せるのかもしれないと思った。
- ・グループ活動のとき、初対面の人が2人もいたのにすぐに楽しくなれた。
- ・初対面の人と、ストレスなしに話せたことがびっくりだった。

#### 4) 4回目

- ・ ブラインドウォークは本当に恐くてたまりませんでした。周りの声がなかったらこれ以上に恐いのか…としみじみ思いました。改めて真の友達を持つことの大切さを実感しました。
- ・ 一人で目を瞑って歩くのはとっても心細くても、誰かが側にいてくれたらすごく安心できるのだと思いました。
- ・ 相手の心の不安などを見極めてサポートの仕方を変えるんだなあ…と思いました。
- ・ “相談にのれない” って中2・中3のときかなり悩みました。でも、話をきくだけでよかったんだとわかりました。
- ・ 人と触れ合う機会ってなかなかないけど、実際心地良いものだなあと思います。

#### 5) 5回目

- ・ “FELOR”を心がけると、話のはずみも違い、面白かったです。ちょっとした聞き手のムードで全然違うものにしていけるのだと分かりました。
- ・ 相談しやすい人は、自分にちゃんと向き合ってくれるだけでなく、ちゃんと聞いてくれるなあという態度をしてくれている人だとわかった。
- ・ ちゃんと話を聴いてもらえてよかったです。
- ・ 友達だからってメールしながら話を聞いたり、気のない返事をしていたから、ちょっと反省した。

#### 6) 6回目

- ・ 質問には“閉ざされた質問”と“開かれた質問”があって、どちらか片方だけを使うと、会話が続かなくなる。ただ、それらにはメリットもデメリットもあって、それらを使い分けることが大切!!
- ・ 質問をただすればいいものじゃなくて、その内容もとても大切なんだなと思いました。
- ・ “開かれた質問”，“閉ざされた質問”などと意識して話をしてみると少し難しいなと初めは思ったけど，“開かれた質問”をしている時は互いにイキイキして話せたかなと思った。
- ・ 今まで「何で？」ってよく言っていました。でも、あんまりいい印象を与えないこともあるんだ!!と知ったので、これからはちょっと注意しようと思います。

#### 7) 7回目

- ・ 相手の言ったことをくり返すだけで話す人は楽になり、話を続けやすくなるということを実感しました。

- ・ 相手の言葉をくり返すのって、失礼かと思っていましたが、相手の気持ちを整理させたりする効果があることが分かったので今度からは使ってみようと思います。
- ・ 自分の感情を相手に理解してもらえなくても、理解しようとしてくれる姿が嬉しい。
- ・ とにかく反復技法難しい!!相手の気持ちを理解するのってすごい大変だなあと思いました。
- ・ 仲の良い友達同士でも、分かった気にならずちゃんと聞いてあげる、聞いてもらう、ということは大切なのだと感じました。

#### 考察

生徒の記述を見ると、まず、生徒が各回の教授内容やねらいを反映した記述を行っていることが読み取れる。全体的な傾向としては、後藤他(2005)と同様の傾向であったと思われる。異なった点として、1回目の時点で後藤他(2005)で見られていた集団での活動への緊張や抵抗を挙げていた記述がなくなり、「堅苦しいものを想像していたが、そうではなくて楽しかった・面白かった」という記述が増加していたことが挙げられる。これは既述のように全員での活動から小グループでの活動に変更したことが影響しているのではないだろうか。

2回目に修了生を招いたことについても、振り返りシートの記述から受講生への影響が読み取れた。修了生の実体験を聞くことで、動機付けを高めていることがうかがわれる。

#### 4. まとめ

本年度は、実践面においては、後藤他(2005)の提案を受け、トレーニングの開始時期を1学期から2学期に変更し、また、修了生をアシスタントとして迎えた。効果評価の面においては、サポートの授受について詳細に検討するために友人の性別、及び知覚されたサポート・実行されたサポートの両者について検討できるよう尺度を改変した。

現時点で見られている後藤他(2004)・後藤他(2005)の相違点としては、以下のことが挙げられる。まず、受講生の特徴について、受講生の数が減ったこと、一方で早期にやめる受講生が見られず受講生の出席率は概ね高値を維持していること、自己受容尺度の得点が統制群より有意に低いことが挙げられる。トレーニングについては、修了生の体験を聴くことで受講生の動機付けが高められ、また、修了生自身が今年度も参加しトレーニングを活用していることがうかがわれる。

また、受講生・統制群とも後藤他(2005)に比べ友

人へのサポート提供尺度・サポート受領尺度の得点が高かった。

以上は、それぞれが相互に関係し合っているのではないだろうか。2学期に開始したことで、元々生徒のサポートの授受は活発になっておりトレーニングを必要とする生徒が減っていたため受講生数は減少した可能性がある。しかし、開始時期をずらしたことで行事による欠席が少なく、また、修了生の体験を聞いたことから受講生の動機付けも高まり早期にやめる生徒がいなかったのではないだろうか。

また、修了生をアシスタントとして招いたことは受講生のみならず修了生にとっても役に立ったことが示唆され、サポート活動の一つの形態として今後も実施していくことは有益であると考えられる。

## 5. 今後の課題と展望

本年度はトレーニングを継続中であり、既述の変更点の影響は今後トレーニングを終えた上での効果評価による詳細な検討が望まれる。

また、本年度は3年間の継続的な研究の最終年であった。この3年間はトレーニングに重きを置いたが、今後はサポート活動の開始も視野に入れるなど、発展が求められる。その一つの案として、後藤(2005)を受けアシスタントを招いた点は上述のように有益であったと考えられる。しかし、参加した修了生は2名であり少なかつた感は否めない。今後は参加者の増加を課題とすべきであろう。本年度のように無理のない形でサポート活動への導入を図りながら、今後は後藤(2005)でも述べたように中高一貫校である特色を生かした本校ならではのピア・サポート活動を展開していくことが必要であると考えられる。

## 6. 引用文献

後藤美由紀・伊賀泰恵・世羅晶子・日浦美智代・溝上

直美・湯浅清治・鈴木康之・兒玉憲一・岡本百合・佐々木祥子 2004 ピア・サポート・トレーニングの実践—コミュニケーション・スキルの獲得を目指して— 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要, 32, 395-403.

後藤美由紀・伊賀泰恵・尾澤 勇・新治 功・世羅晶子・溝上直美・兒玉憲一・内野悌司・岡本百合・佐々木祥子 2005 生徒の心をサポートする—ピア・サポート・トレーニングの実践(第2報)— 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要, 33, 421-427.

橋本 剛 2005 ストレスと対人関係 ナカニシヤ出版

平石賢二 1990 青年期における自己意識の構造—自己確立感と自己拡散感からみた心理学的健康— 教育心理学研究, 38, 320-329.

三島徳雄 1999 積極的傾聴法の評価 三島徳雄・新小田春美(編著) 看護に生かす積極的傾聴法—ここが通い合うコミュニケーションをめざして— メディカ出版 Pp. 176-185.

森川澄男 2002 ピア・サポートとは(理論編) 中野武房・日野宜千・森川澄男(編著) 学校でのピア・サポートのすべて—理論・実践例・運営・トレーニング— ほんの森出版 Pp. 19-35.

佐々木祥子 2004 高校生を対象としたピア・サポート・トレーニングの効果評価方法の検討 平成15年度広島大学大学院教育学研究科修士論文(未公刊)

田邊昭雄 1999 学校におけるピア・サポート—ピア・カウンセリング的な援助の試み— 高校教育展望, 23, 110-114.

谷口弘一・浦 光博 2003 児童・生徒のサポートの互恵性と精神的健康との関連に関する縦断的研究 心理学研究, 74, 51-56